

コミュニケーションの指導の大変さ、面白さ、楽しさに触れた。鎌田修本学教授も「異文化接触の日本語教育」と題して講演を行い、ありのままの接触場面を研究することの重要性を具体例を挙げて解説し、日本語教育への応用の可能性について説いた。また、李徳奉同徳女子大教授の司会のもと異文化理解教育のための日本語教育について参加教員・大学院生全員で討論会が行われ、韓国に合った日本語教育の実践可能性を模索した。本学大学院生は、同徳女子大の韓国人大学院生との交流に加え、同大学に籍を置く日本人大学院生とも交流を深め、海外（この場合は韓国）で日本語教育を実践する上で発生する問題点などの貴重な情報を得た。二日目（18日）には、坂本正本学教授の司会のもと、韓国の映像文化がなぜ日本、台湾、中国で受け入れられているかについてディスカッションが行われ、東アジアに共通の特徴があることから異文化教育における視点を各国の相違点から類似点に転換する必要があるとの結論に達した。一行は、19日にソウルを立ち、同日名古屋に到着した。

2.5. 本事業に先立って行われたコンソーシアム活動

Cambridge-Hyderabad-Nanzan Joint Seminar on Functional and Lexical Categories

(2006年3月8日～10日) 南山大学言語学研究センター主催

本事業に先立ち、本学言語学研究センターは、2006年3月8日～10日の日程でイギリス・ケンブリッジ大学、インド・ハイデラバード国立言語研究所と合同セミナーを開催した。事業計画の細部を詰めるにあたって、共同イベントを行い、意見交換をすることが目的であった。3大学の教員5名がそれぞれ講義を行い、また大学院生も研究発表を行った。



一日目はまずハイデラバード国立言語研究所の R. Amritavalli 教授がドラビダ系言語の時制や相の表現と形容詞表現の関係をもとに、機能範疇と語彙範疇の起源を探求する講義を行った。続いてケンブリッジ大学の大学院生 Marc Richards 氏がフェーズと機能範疇の関係について研究を発表し、その後有元将剛本学教授が英語のコピュラ文について講義を行った。

二日目は青柳宏本学教授の日本語と韓国語の動詞形態論についての講義で始まり、ハイデラバード国立言語研究所の Deepti Ramadoss 氏が否定表現に注目しながらタミル語の機能範



疇の獲得について発表した。その後、本学大学院生・青野ますみ氏が日本語の「ている」構文を詳細に検討し、動作の進行を表す「ている」と完了を表す「ている」を統一的に扱う分析を発表し、最後にケンブリッジ大学 Ian Roberts 教授が統語的变化における機能範疇の役割について講義を行った。

三日目はまずケンブリッジ大学の若手研究者 Theresa Biberauer 氏が補文化辞と時制辞の性質の差異について発表し、ハイデラバード国立言語研究所の Madhavi Gayathri Raman 氏が屈折表現の第二言語習得における特定言語損傷の事例 (R. Amritavalli 教授と共同研究) を報告した。昼食後、本学大学院生・富士千里氏が日本語と日本手話における二種類の結果構文の獲得を検証して、幼児の言語が示す生得的な言語能力について論じた。その後に行われたハイデラバード国立言語研究所 K.A. Jayaseelan 教授による講義では、SOV 言語と SVO 言語が比較され、主題要素、強調要素、副詞の位置の分析が解説された。

講義と研究発表に続くディスカッションでは、若手研究者による活発な討論が行われて、共同研究のテーマが多数提案され、本事業の意義が確認された。このワークショップで発表された若手研究者の研究発表の要旨は2006年6月に南山大学言語学研究センターより出版された *Nanzan Linguistics* 3 に収録されている。また、これらの若手研究者による発表は論文として執筆され、そのうちの4編が2007年3月に本事業の一環として出版された *Nanzan Linguistics, Special Issue 1, Volume 1* に収録されている。(3.2.1 を参照)



(8日)

10:00 R. Amritavalli

The Origins of Functional and Lexical Categories: Tense-Aspect and Adjectives in Dravidian

13:45 Marc Richards

On Phases, Phase Heads, and Functional Categories

15:15 Masatake Arimoto

Copular Clauses in English

(9日)

9:15 Hiroshi Aoyagi

On Verbal Morphology in Japanese and Korean

12:00 Deepti Ramadoss

The Acquisition of Functional Categories in Tamil with Special Reference to Negation

14:30 Masumi Aono

Derivational Theta-marking and a Uniform Analysis of the Progressive/Perfective ~te iru

16:00 Ian Roberts

The Role of Functional Categories in Syntactic Change

